幼少期の運動遊び体験からみた保育者養成課程の学習指導内容に関する一考察

A Study on Teaching Contents of Childcare Worker Training Courses based on the Physical Play Experiences of Childhood

畑　野　裕　子[1)]・阪　江　　豪[2)]

Yuko HATANO・Go SAKAE

要　旨

本研究では、幼児体育や保育内容「健康」において、保育者養成課程の授業の学習指導内容に関する示唆を得ることを目的として、学生の幼少期の運動遊び体験をもとに検討を行った。方法は、保育士資格や幼稚園教諭免許の取得を目指す保育者養成課程の女子大学生を対象に、学生の幼少期の運動遊び体験に関する自由記述について、テキストマイニングを用いて分析した。その結果、得られた知見に関して整理・考察すると、次のようであった。

1）保育所・幼稚園時代では、「戸外遊び」「室内遊び」が特徴的なまとまりとしてとらえられた。

2）小学校時代では、「運動遊び」「運動種目」が特徴的なまとまりとしてとらえられた。

3）保育所・幼稚園時代と小学校時代に共通してみられたまとまりでは、「友達との遊び」「家族との遊び」「習い事」としてとらえられた。

4）学生の幼少期の運動遊び体験を踏まえ、保育者養成課程における授業では、「マット」などの器械体操用具を使用した遊び、室内で行えるような鬼ごっこ、遊具での遊びにあわせて伝承遊びや、集団遊びを意識的に行う必要があると考えられる。

保育者養成課程の授業の中で、学生が自ら様々な運動遊びを体験することは、保育者として子どもの遊びの姿やその関わり方、環境構成、安全への配慮、運動遊びの大切さなどの気付きにつながり、見通しをもった保育の計画・展開ができるようになると考えられる。これらのことからも、授業における運動遊び体験の充実と、その体験を踏まえた保育実践へのつながりをもてることが望まれる。

キーワード：子ども、運動遊び、幼児体育、保育内容「健康」

Ⅰ．緒言

文部科学省は、平成19年度から21年度に「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」（文部科学省，

1）神戸親和女子大学　発達教育学部　児童教育学科

2）花園大学　社会福祉学部　児童福祉学科，神戸親和女子大学　非常勤講師

2011）において、幼児期に獲得しておくことが望ましい基本的な動き、生活習慣及び運動習慣を身に付けるための効果的な取組などについての実践研究を行っている。その成果を踏まえて、「幼児期運動指針策定委員会」が設置され、幼児期における運動の在り方についての指針の策定作業が行われた。そして、「幼児期運動指針」（文部科学省，2012)、「幼児期運動指針ガイドブック」（文部科学省，2013a）及び「幼児期運動指針普及用パンフレット」（文部科学省，2013b）が取りまとめられている。これらの指針などに示されているように、幼児期の運動体験は、「生涯にわたって心身ともに健康的に生きるための基盤を培う」ために、重要であることは言うまでもない。しかしながら、保育者を目指す学生には、どのような運動遊びの体験があるのであろうか。保育の実践において、指導者である保育者の運動や運動遊びの体験が乏しいならば、子どもとともに豊かな保育を展開させることに課題を有する可能性が推察される。

平成29年３月に告示された幼稚園教育要領（文部科学省，2017）や保育所保育指針（厚生労働省，2017)、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領（内閣府，2017）の保育内容「健康」の領域において、そのねらいには、「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。」と示されている。また、その内容にも「(2）いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。(3）進んで戸外で遊ぶ。(4）様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。」などが示されている。したがって、将来保育者を目指す学生が幼児体育や保育内容「健康」を学習する際に、学習者の運動遊びの実体験に基づく理解の促進を図るための手がかりを明らかにしようと考える。

そこで本研究では、幼児体育や保育内容「健康」において、保育者養成課程の授業の学習指導内容に関する示唆を得ることを目的として、学習者の幼少期の運動遊び体験を視点として検討を試みることとする。

Ⅱ．方法

１．対象者

４年制女子大学の保育者養成課程において、保育士資格・幼稚園教諭免許の取得を目指す１回生102名。

２．質問内容

幼少期における運動遊びの体験に関して、保育所・幼稚園時代と小学校時代に分けて思い出すよう求めた。そして、各々の時代に、保育所・幼稚園及び小学校で行った運動遊び、家庭で行った運動遊び、その他の施設で行った運動遊びに分けて記入するよう求めた。

３．調査期間

2016年９月

４．分析の手続き

まず、調査対象者から回収した回答に関して、全ての記述を書き起こした。そして、それらの記載内容に関して、テキストマイニングをKH Coder 2.00f（樋口，2001，2014，2015）を用いて分析した。

５．運動遊び体験に関する構造の把握

運動遊び体験について形態素解析を行ない、語句に含まれている名詞句の出現頻度を把握した。そして、出現頻度上位語句の共起ネットワークを作成し、そのまとまりから構造を解釈した。

Ⅲ．結果

１．保育所・幼稚園時代にみられた園での運動遊び

(1)　運動遊び体験に関する語句の形態素解析

学生の保育所・幼稚園時代の園(以下､保育所・幼稚園（園)）における運動遊びの体験について、計量的分析を行うため、テキストマイニングによる形態素解析を行った｡その結果､抽出語総数は、計966語であった。表１は、名詞句のうち、出現回数５以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。抽出語をみると、保育所・幼

稚園（園）で最も出現回数が多いのは、「友達」143であり、続いて「鬼ごっこ」58、「鉄棒」29、「縄跳び」25、「先生」23、「遊具」22、「幼稚園」21、「ブランコ」18、「遊び」15、「竹馬」13、「すべり台」12、「ボール」11、「ジャングルジム」8、「ドッジボール」「公園」「三輪車」「保育園」6、「グラウンド」「プール」「砂場」5となっている。

表1　保育所・幼稚園（園）における出現回数5以上の名詞句（頻度順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友達	143	すべり台	12
鬼ごっこ	58	ボール	11
鉄棒	29	ジャングルジム	8
縄跳び	25	ドッジボール	6
先生	23	公園	6
遊具	22	三輪車	6
幼稚園	21	保育園	6
ブランコ	18	グラウンド	5
遊び	15	プール	5
竹馬	13	砂場	5

(2) 保育所・幼稚園（園）の運動遊び体験に関する語句の構造

抽出語間の関連性を探索するために、表1に示した抽出語を含め、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果は図1に示す。図1によって、各抽出語同士の結びつきを俯瞰的にみてみる。図1では、「友達」を中心として「鬼ごっこ」「縄跳び」「遊具」「鉄棒」などの「戸外遊び」のまとまりがみられた。その他にも、「遊戯」「リズム」「教室」「合わせる」「先生」などの「室内遊び」のまとまりがみられた。

2．保育所・幼稚園時代にみられた家庭での運動遊び

(1) 運動遊び体験に関する語句の形態素解析

幼稚園時代の家庭（以下、保育所・幼稚園（家））における運動遊びの体験について、計量的分析を行うため、テキストマイニングによる形態素解析

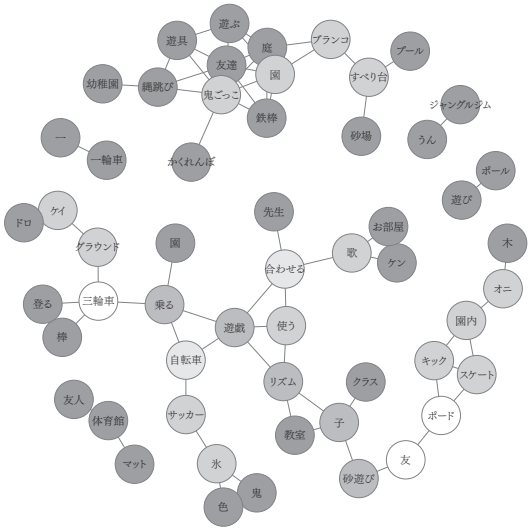

図1　保育所・幼稚園（園）の運動遊び抽出語間の共起ネットワーク

を行った。その結果、抽出語総数は、計755語であった。表2は、名詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。

保育所・幼稚園（家）で最も出現回数が多いのは、「友達」70であり、続いて「公園」52、「鬼ごっこ」30、「近所」20、「家族」15、「ブランコ」「自転車」14、「幼稚園」13、「遊び」11、「ボール」9、「遊具」8、「縄跳び」7、「すべり台」「放課後」6、「保育園」5となっている。

表2　保育所・幼稚園（家）における出現回数5以上の名詞句（頻度順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友達	70	遊び	11
公園	52	ボール	9
鬼ごっこ	30	遊具	8
近所	20	縄跳び	7
家族	15	すべり台	6
ブランコ	14	放課後	6
自転車	14	保育園	5
幼稚園	13		

(2) 保育所・幼稚園（家）の運動遊び体験に関する語句の構造

抽出語間の関連性を探索するために、表2に示

した抽出語を含め、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果は図２に示す。図２では、「父」「練習」「キャッチボール」「自転車」などの「家族との遊び」がみられた。その他にも「友達」「公園」「鬼ごっこ」「かくれんぼ」などの「友達との遊び」がみられた。

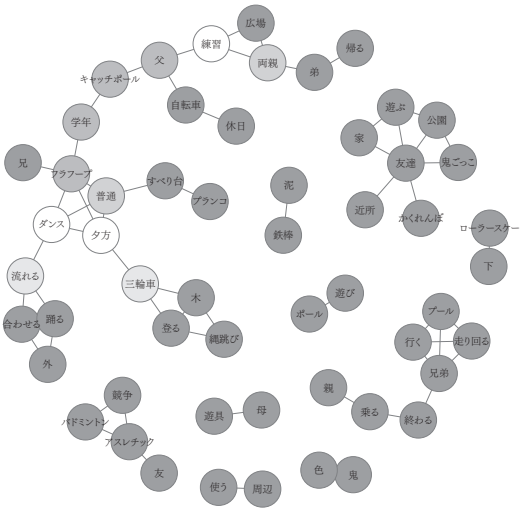

図２　保育所・幼稚園（家）の運動遊び
抽出語間の共起ネットワーク

３．保育所・幼稚園時代にみられたその他の施設での運動遊び

(1)　運動遊び体験に関する語句の形態素解析

学生の保育所・幼稚園時代のその他の施設（以下、保育所・幼稚園（他））における運動遊びの体験について、計量的分析を行うため、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、抽出語総数は、計210語であった。表３は、名詞句のうち、出現回数５以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。保育所・幼稚園（他）で最も出現回数が多いのは、「習い事」23であり、続いて「友達」13、「鬼ごっこ」６、「放課後」「幼稚園」５となっている。

表３　保育所・幼稚園（他）における出現回数５以上の名詞句（頻度順）

抽出語	出現回数
習い事	23
友達	13
鬼ごっこ	6
放課後	5
幼稚園	5

(2)　保育所・幼稚園（他）の運動遊び体験に関する語句の構造

抽出語間の関連性を探索するために、表３に示した抽出語を含め、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果は図３に示す。図３では、「放課後」を中心に、「マット」「クラブ」「体操」「運動」や、「ダンス」「習い事」「水泳」「水遊び」などの「習い事」のまとまりがみられた。

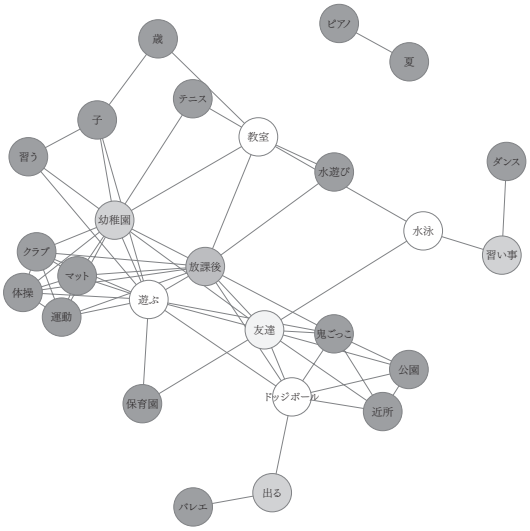

図３　保育所・幼稚園（他）の運動遊び
抽出語間の共起ネットワーク

４．小学校時代にみられた学校での運動遊び

(1)　運動遊び体験に関する語句の形態素解析

学生の小学校時代の学校（以下、小学校（学校））における運動遊びの体験について、計量的分析を

行うため、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、抽出語総数は、計1384語であった。表４は、名詞句のうち、出現回数５以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。

小学校（学校）で最も出現回数が多いのは、「友達」176であり、続いて「ドッジボール」57、「鬼ごっこ」56、「休み」44、「校庭」36、「一輪車」「鉄棒」33、「学校」29、「ケイ」「縄跳び」25、「バレーボール」20、「昼休み」「遊具」16、「バスケットボール」「学年」13、「小学校」「放課後」12、「サッカー」「ブランコ」「体育館」「竹馬」11、「公園」10、「ボール」「遊び」９、「ベース」「高学年」８、「すべり台」「体育」７、「小学生」「先生」６、「クラブ」「グラウンド」「ジャングルジム」「タイヤ」「バドミントン」５となっている。

表４　小学校（学校）の出現回数
５以上の名詞句（頻度順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友達	176	ブランコ	11
ドッジボール	57	体育館	11
鬼ごっこ	56	竹馬	11
休み	44	公園	10
校庭	36	ボール	9
一輪車	33	遊び	9
鉄棒	33	ベース	8
学校	29	高学年	8
ケイ	25	すべり台	7
縄跳び	25	体育	7
バレーボール	20	小学生	6
昼休み	16	先生	6
遊具	16	クラブ	5
バスケットボール	13	グラウンド	5
学年	13	ジャングルジム	5
小学校	12	タイヤ	5
放課後	12	バドミントン	5
サッカー	11		

⑵　小学校（学校）での運動遊び体験に関する語句の構造

抽出語間の関連性を探索するために、表４に示した抽出語を含め、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果は図４に示す。図４では、「鬼ごっこ」「ドッジボール」「遊ぶ」「友達」「鉄棒」「一輪車」などの「運動遊び」のまとまりがみられた。その他にも、「バレーボール」「バスケットボール」「サッカー」などの「運動種目」のまとまりがみられた。

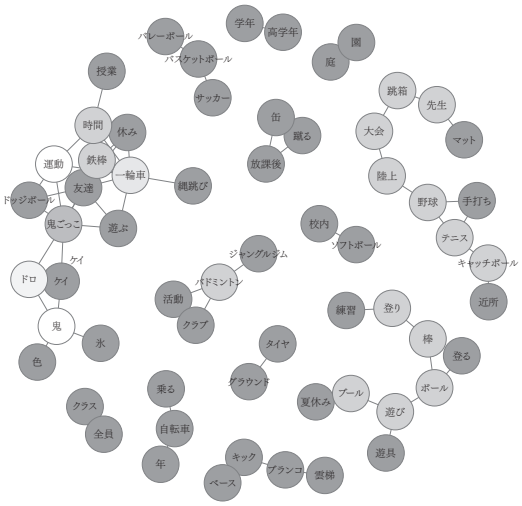

図４　小学校（学校）の運動遊び
抽出語間の共起ネットワーク

５．小学校時代にみられた家庭の運動遊び

⑴　運動遊び体験に関する語句の形態素解析

学生の小学校時代の家庭（以下、小学校（家））における運動遊びの体験について、計量的分析を行うため、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、抽出語総数は、計1012語であった。表５は、名詞句のうち、出現回数５以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。

小学校（家）で最も出現回数が多いのは、「友達」119であり、続いて「公園」71、「鬼ごっこ」44、「近所」33、「放課後」29、「一輪車」25、「縄跳び」17、「自転車」14、「ドッジボール」「バドミントン」13、「サッカー」12、「キャッチボール」「ブランコ」11、「ケイ」「家族」「遊び」「遊具」９、「バレーボール」「ボール」８、「すべり台」「バスケットボール」６、「ローラースケート」「小学校」「鉄棒」「野球」５となっている。

表５　小学校（家）における出現回数
５以上の名詞句（頻度順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友達	119	ケイ	9
公園	71	家族	9
鬼ごっこ	44	遊び	9
近所	33	遊具	9
放課後	29	バレーボール	8
一輪車	25	ボール	8
縄跳び	17	すべり台	6
自転車	14	バスケットボール	6
ドッジボール	13	ローラースケート	5
バドミントン	13	小学校	5
サッカー	12	鉄棒	5
キャッチボール	11	野球	5
ブランコ	11		

⑵　小学校（家）の運動遊び体験に関する語句の構造

抽出語間の関連性を探索するために、表５に示した抽出語を含め、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果は、図５に示す。図５では、「家族」「プール」「父」「キャッチボール」「弟」などの「家族との遊び」がみられた。その他にも、「友達」「鬼ごっこ」「公園」「遊ぶ」「近所」などの「友達との遊び」がみられた。

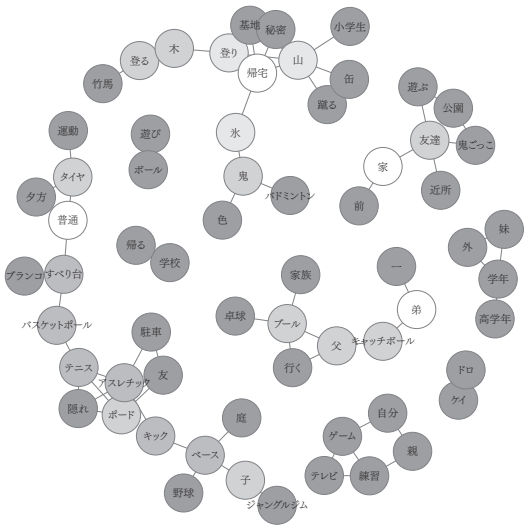

図５　小学校（家）の運動遊び
抽出語間の共起ネットワーク

６．小学校時代にみられたその他の施設での運動遊び

⑴　運動遊び体験に関する語句の形態素解析

運動遊び体験について、学生の小学校時代のその他の施設（以下、小学校（他））における運動遊びの経験について、計量的分析を行うため、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、抽出語総数は、計520語であった。表６は、名詞句のうち、出現回数５以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。

小学校（他）で最も出現回数が多いのは、「習い事」59であり、続いて「友達」19、「教室」14、「バレーボール」13、「小学校」12、「バスケットボール」11、「学童」９、「クラブ」「児童」「体育館」「放課後」８、「バドミントン」「鬼ごっこ」６、「チーム」「テニス」「ドッジボール」５となっている。

表６　小学校（他）の出現回数
５以上の名詞句（頻度順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
習い事	59	児童	8
友達	19	体育館	8
教室	14	放課後	8
バレーボール	13	バドミントン	6
小学校	12	鬼ごっこ	6
バスケットボール	11	チーム	5
学童	9	テニス	5
クラブ	8	ドッジボール	5

⑵　小学校（他）の運動遊び体験に関する語句の構造

抽出語間の関連性を探索するために、表５に示した抽出語を含め、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果は、図６に示す。 図６では、「練習」「大会」「仲間」「習う」「ピアノ」や、「習い事」「水泳」といった「習い事」のまとまりがみられた。

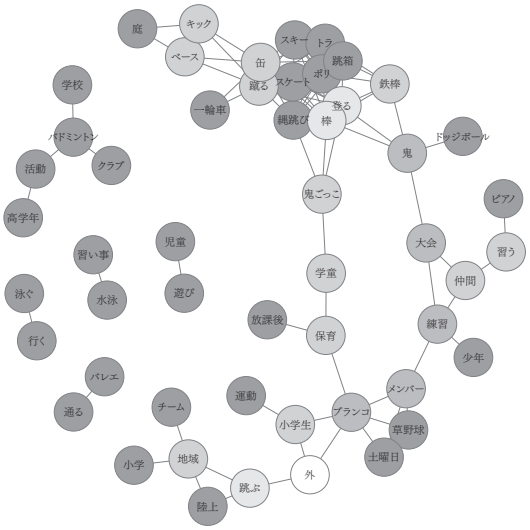

図６　小学校（他）の運動遊び
抽出語間の共起ネットワーク

Ⅳ．考察

女子大学生の幼少期における運動遊び体験の結果を概観すると、保育所・幼稚園時代では、大きく「戸外遊び」「室内遊び」に分けられた。小学校時代では、大きく「運動遊び」「運動種目」に分けられた。そして、保育所・幼稚園時代と小学校時代において、共通してみられたのは、「友達との遊び」「家族との遊び」「習い事」であった。

まず、保育所・幼稚園時代にみられた運動遊び体験について検討する。保育所・幼稚園における「戸外遊び」では、「鬼ごっこ」「鉄棒」「縄跳び」「遊具」「ボール」などの遊びが多くみられた。すなわち学生たちは、鬼ごっこや鉄棒など、身体を活発に動かす遊びや、遊具を使った遊びを多く実施してきたことがうかがえる。幼児期の遊びにおいて、戸外で身体を活発に動かして遊ぶことは、心身の発達において重要な役割をもっている。「鬼ごっこ」などの集団的な遊びを経験することは、ルールを理解して仲間に入ることや、自分の気持ちを調整することにもつながるとされている（木村ら，2009）。それらを、日々の生活の中で行われる遊び体験として記憶していることは、今後、保育者として保育を展開するうえで、子どもたちに「友達と一緒に身体を動かす楽しさ」を伝えることに役立つと考えられる。

その他にも、園における「室内遊び」では、「遊戯」「リズム」「教室」「合わせる」「先生」のまとまりがみられたことから、園における身体表現活動が印象に残る体験としてあげられていた。しかしながら、マットや跳び箱などの器械体操用具を使った運動遊びは、記述が少ないことからも、印象に残っていない、あるいはあまりされていないことが示唆された。吉田ら（2012）によると、幼稚園での運動指導は、外部派遣講師によって行われていることが多く、その中で実施される活動は、「マット、鉄棒、跳び箱」がなされており、それが子どもにとって、本当の「遊び」であるかどうかは慎重に判断すべきであると述べている。このことからも、室内遊びにおけるマットなどの使用は、保育者が遊びとして行う必要性があると考えられる。

次に、小学校時代にみられた運動遊び体験について検討する。小学校における「運動遊び」では、「鬼ごっこ」「ドッジボール」「ケイドロ」「ジャングルジム」「一輪車」などがみられた。小学校へ進学しても、色鬼や氷鬼などの「鬼ごっこ」の遊びは、保育所・幼稚園時代と同様に行われていることがうかがえる。

「運動種目」では、「バレーボール」「バスケットボール」「サッカー」「バドミントン」などの運動種目があげられるようになった。小学校に入学すると体育科が授業として実施されるようになり、遊び内容も運動種目化されるようになったと考えられる。村瀬ら（2007）は、現代の子どもは、親世代と比べて広場や空き地で遊ばなくなってきていることを指摘している。また、遊びの孤立化が進んでいること、スポーツクラブなどへの参加、親、先生など大人との関わりも外遊び・スポーツ遊びに親しむことへの促進要因であることを報告している。小学校において、授業の内外で運動遊びや運動種目に触れることにより、子ども同士の関係性の確立や、それらに親しみをもって活動することにつながる機会が得られると考えられ

る。また、國土（2003）は、子どもの遊びについて、どのような遊びが多く実施されているのかを明らかにするために、学年別の調査を行っている。その結果、幼児期では、「鬼ごっこ」「かくれんぼ」「ドッジボール」の頻度が高い。そして小学生になると、「ドッジボール」「サッカー」「バスケット」などのスポーツ遊びが、頻度の高い遊びとして出現することを報告している。本研究の学生の体験記述でみられた遊びの変化傾向についても、國土の結果とほぼ同様のものであった。したがって、学生の幼少期の遊びは、発達段階に応じて変化していったものと推察できる。

保育所・幼稚園、小学校に共通してみられた運動遊びの中で、「友達との遊び」「家族との遊び」について検討する。保育所・幼稚園、小学校ともに最頻出単語は、「友達」であった。このことは、家庭での遊びを考える上で、身近な遊び仲間として友達や家族があげられることは、当然である。運動遊びは、ルール上、複数人で行う遊びが多く、運動遊びによって協調性や社会性が培われるとされている（杉原ら，2010）。幼少期の家庭において誰と遊んだか、という部分では、友達か家族が最も印象に残っているのであろう。しかしながら、「友達との遊び」では、「鬼ごっこ」や「かくれんぼ」など、遊びの要素が強いことが読み取れる。それに対し、「家族との遊び」は、「キャッチボール」や「自転車」など、練習の要素が強くみられた。これらのことから、同じ遊び仲間という認識であっても、その活動内容は、友達と家族とでは役割が異なることが示唆された。

「習い事」については、幼児期から「水泳」「体操」「ダンス」などがなされており、その習い事も時期や内容によっては、遊びの一つとして捉えられていることがうかがえた。しかしながら、習い事の経験は、「習っていた」・「習っていなかった」という回答者の経験の差が生じる。大澤（2008）は、子どもの経験は、家庭によって平等ではないと報告している。習い事をしている家庭と習い事をしていなかった家庭では、その経験に差が生じる。「習い事」の中でされるような遊びは、保育や教育の場で保証されなければ、経験の差につながることが危惧される。

以上の結果をもとに、女子大学生の体験において、保育所・幼稚園では、鬼ごっこや色鬼、氷鬼などの「鬼ごっこ」遊び、「鉄棒」「ブランコ」「すべり台」などの遊具や、「ボール」遊びがみられた。

小学校では、「鬼ごっこ」「ドッジボール」などの同じ遊びが継続されている。さらにその遊びに加え「バドミントン」「バスケットボール」「バレーボール」がみられた。これらのような身体を活発に動かせる遊びは、体験として印象に残っていることがうかがえた。また、室内で身体を動かして遊ぶような運動遊びは、「ダンス」「踊る」といった身体表現活動が印象として残っていることがうかがえた。

運動遊びを保育として展開するにあたり、学生がこれら以外の活動を保育者養成課程の授業の中で体験する機会をもつことは、保育の幅が広がり、実習や保育士として働く際の一助になると考える。例えば、「習い事」で行うような「マット」や、それら器械体操用具を使用した遊び、室内で行えるような鬼ごっこ、または、運動能力や遊び経験に男女差がみられるようなボールを使用した遊び（吉田ら，2003）などが考えられる。岸本ら（2002）は、女子大学生の遊び体験について、遊具を使う遊びは、学校や幼稚園・保育所の体力作りで活用すること、遊びでも使うように動機づける工夫が必要なことを報告している。また、女子大学生の経験の中に「よくした」が25% 以下の遊びをあげている。具体的には、全身運動遊びでは、Sケンやうずまきじゃんけん、手先の操作運動では、おはじき、ビー玉、まりつきなどの遊びの衰退傾向が著しいとしている。本研究においても、それらに関する遊びの記述は、ほとんどみられなかった。さらに、黒岩（1999）は、基礎的運動能力や調整力など、子どもにつけさせたい能力の獲得にSケンなどの伝承遊びが有効であることを示している。また、それらの遊びを学生が体験することにより、子どもへの遊びを考え、保育を実践するにあたり、有効であろうことを報

告している。中村（2004）は、子どもの遊び方において、昔と今の子どもでは同じ遊びでも、遊び方が異なり、今の子どもよりも昔の子どもの方が集団で遊んでいたと述べている。これらのことからも、遊具での遊びにあわせて伝承遊びや、集団遊びを意識的に行う必要もあると考えられる。

スキャモン（1930）の発育曲線が示すように、幼児期は神経系の発達が著しく、神経系は身体を巧みに動かす運動コントロール能力に大きく影響する。また、ガラヒュー（1999）が示すように、幼児期及び児童期は基礎的な運動の段階である。これらのことからも、幼少期に様々な運動遊びに触れることは、自身の運動コントロール能力の発達や危険回避能力の向上につながり、将来の健康習慣や身体活動を行う上での基礎となる。

また、子どもの発育発達において、重要な時期に関わる保育者を目指す学生を指導するにあたり、学生の体験から多く実施された遊びや、あまり実施されなかった遊びを把握することが重要と思われる。このような視点から、保育に携わる大学生の遊び体験の想起とその重要性について報告した研究もみられる（黒岩；1999，森ら；2002，畑野；2018）。学生の遊び体験を把握することは、保育実践として必要な遊びの保育方法を、大学の保育者養成課程の授業の中で効率よく行うことにつながると考えられる。しかしながら、学生の運動遊びの体験について、幼少期の記憶の想起による記述となるため、記述内容に個人差がみられることや、体験していたが印象に残っておらず、記述されていない可能性などの研究の限界が推察される。

子どもの遊び不足が懸念される現代では、子どもの生活や遊びに直接関わる保育者の豊富な体験が必要である。学生が遊びを体験し、その保育方法を知ることは、「遊びの体験不足」が懸念されているような昨今の子どもと関わるうえで、意義のあることと考えられる。幼児期運動指針（文部科学省，2012）では、子どもに「多様な動きの経験ができるように様々な遊びを取り入れること」を提示している。幼児期においての遊びは、特定の運動に偏ったものではなく、遊びの中で多様な動きを経験することで、多様な動作が獲得される。それらは、遊びの中で発現する動きであり、普段の生活の中で行われるものである。また、身体のコントロールは、危険回避の動きにもつながる。さらに、幼児期運動指針（文部科学省，2012）では運動の意義において、①体力・運動能力の向上、②健康な体の育成、③意欲的なこころの育成、④社会適応力の発達、⑤認知的能力の発達があげられている。これらのことから、幼少期の豊富な運動遊びの経験は、からだやこころの発達に大きく寄与することが考えられる。

保育者養成課程の授業の中で、学生が自ら様々な運動遊びを体験することは、保育者として、子どもの遊びの姿やその関わり方、環境構成、安全への配慮、運動遊びの大切さなどの気付きにつながり、見通しをもった保育の計画・展開ができるようになると考えられる。これらのことからも、授業における運動遊び体験の充実と、その体験を踏まえた保育実践へのつながりをもてることが望まれる。

Ⅴ．文献

Gallahue, D. L. 著，杉原隆 監訳（1999）幼少年期の体育　発達的視点からのアプローチ，大修館書店，pp. 56-88.

畑野裕子（2018）子どもの運動遊びに関する研究動向と展望に関する一考察－CiNii掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて－，神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報創刊号，151-162.

樋口耕一（2001）KHcoder（http://khc.sourceforge.net）最終アクセス2017年10月19日.

樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析　内容分析の継承と発展を目指して，ナカニシヤ出版.

厚生労働省（2017）保育所保育指針http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf

木村美知代，村岡眞澄（2009）運動遊びを楽しむ

幼児を育てる，愛知教育大学教育実践総合センター紀要12, 237-242.
岸本肇，勝木洋子（2002）青年女子層の遊び体験に関する研究－幼児教育専攻学生に対する調査をもとにして－，神戸大学発達科学部研究紀要 9 (2), 29-37.
國土将平（2003）発達段階と子どもの遊び，子どもと発育発達 1 (3), 142-147, 杏林書院.
黒岩英子（1999）保育科学生の屋外での運動遊びの実践と検討，西南女学院短期大学研究紀要46, 145-154.
文部科学省（2011）体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm.
文部科学省（2012）幼児期運動指針 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
文部科学省(2013a)幼児期運動指針ガイドブック.
文部科学省（2013b）幼児期運動指針普及用パンフレット.
文部科学省（2017）幼稚園教育要領http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/index.htm
森博文，岸本肇，栗原武志，廣瀬勝弘，北川隆（2002）幼児・学童期における遊び体験に関する研究：幼児教育専攻学生に対する調査から，九州女子大学紀要 人文・社会科学編39 (1), 31-44.
村瀬浩二，落合優（2007）子どもの遊びを取り巻く環境とその促進要因：世代間を比較・して，体育学研究52, 187-200.
内閣府（2017）幼保連携型認定子ども園教育・保育要領http://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kokujibun.pfd
中村和彦（2004）子どものからだが危ない!－今日からできるからだづくり，日本標準，pp.67-68.
日本発育発達学会 偏（2014）幼児期運動指針実践ガイド，杏林書院.
大澤真平（2008）子どもの経験の不平等，教育福祉研究14，1 -13.
Scammon, R. E.（1930）The measurement of the body in childhood, In Harris, J. A., Jackson., C. M., Paterson, D. G. and Scammon, R. E.（Eds）. The Measurement of Man, Univ. of Minnesota Press,Minneapolis.
杉原隆，吉田伊津美，森司朗，筒井清次郎，鈴木康弘，中本浩揮，近藤充夫（2010）幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係，体育の科学60, 341-347.
吉田伊津美，杉原隆，近藤充夫（2003）幼児の運動能力の性差における運動経験の影響，福岡教育大学紀要52(4), 253-262.
吉田伊津美，岩崎洋子（2012）幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識：国公立幼稚園と私立幼稚園との比較，東京学芸大学紀要総合教育科学系63(1), 107-113.